

# 甲虫ニュース

No. 129  
April 2000



## COLEOPTERISTS' NEWS

日本産ハナノミ科ハナノミ族概説 4<sup>1)</sup>

高 桑 正 敏

*Macroglipta* 亜属は多様な形態を示し、次のようにいくつかグルーピングすることができる。

オオオビハナノミグループ：体は大きく細長い；鞘翅は長く、後方にほぼまっすぐに狭まり、端は幅狭く、また端紋を欠く；尾節はかなり長く、雄では基部幅よりも長く、また下面は縦に凹陷して端は2葉状、雌では膨隆する；雌雄とも後肢端は尾節板を越えない；雄交尾器側葉片の左片の膜質突起は基片と水平に伸び、右片は膜質突起の基部がやや強くくびれ、その側方の基片肩部は弱く丸く張り出し、付属枝はほぼ直線状で長い。オオオビハナノミのほか、アヤオビハナノミ、ザウテルオビハナノミ、オガサワラオビハナノミ、クサカベオビハナノミが含まれる。また海外では、ザウテルオビハナノミを除けば東南アジアに数種が局地的に分布しているようである。

カルベオビハナノミグループ：体は短く頑強、後胸は側部で強く膨らみ、背面からは弧状に張り出して認められる；鞘翅は端紋を欠く；尾節板は非常に短く（尾節の1.4倍）、上下に強く圧せられ、端部で弱く隆状を呈するにすぎない；尾節は雄では強く縦に凹陷し、端は弱く2葉状、雌では厚みがあるが下面はほぼ平坦；雄交尾器側葉片の左片の膜質突起は基片に対し直角に伸び、右片は膜質突起の基部のくびれ、基片肩部の張り出しとともに弱く、付属枝は内方に弧状に曲がる。カルベオビハナノミ1種から成るが、筆者の手元にはそれと明らかに近縁なタイ産の標本があり、また

中国雲南省からも斑紋バタンのよく似た種が記載されているほか、北ベトナムには一見よく似た別種も産する。

ワモンオビハナノミグループ：触角はやや細く、第5節以降は弱い鋸歯状；鞘翅は中央に明瞭な環状紋を備え、また端紋をもつ；尾節板は雄で尾節の約2倍程度、端は広く切断状；尾節は雄では腹面の大部分が広く凹み、端はかすかに2葉状、雌ではほぼ平坦；雄交尾器側葉片の左片の膜質突起は基片に対し直角に伸び、右片は基片肩部の張り出しを欠き、付属枝は端部のねじれがわずかで端突起も短い。日本ではワモンオビハナノミとキンモンオビハナノミの2種を含み、北インドにも非常に近似した種を産する。

イリエオビハナノミグループ：前グループに一見近いが、鞘翅には環状紋を形成しない；尾節板は大変短くて雄で尾節の約1.5倍、端は広く切断状、背面の隆起はかなり緩やか；雄の尾節は端半で凹陷し、端はわずかに2葉状、雌では平坦；雄交尾器側葉片の左片の膜質突起は基片に対し直角に伸び、右片は膜質突起基部のくびれが著しく、基片肩部の張り出しは大きく丸く、付属枝は端部のねじれが強く端突起も長い。イリエオビハナノミ1種だけを含むが、インドシナには他に少なくとも2種を産する。

オオシマオビハナノミグループ：体は長く、両側はほぼ平行；鞘翅は基部紋と中央帯、後方帯から成り、これらは互いに会合部でつながる；尾節板は雄

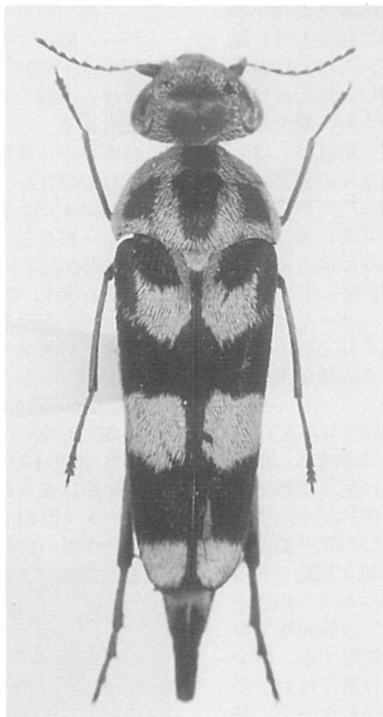


図1. キンモンオビハナノミ *Glipa* (*Macroglipta*) *asahinai* NAKANE & NOMURA, ♀.

<sup>1)</sup> TAKAKUWA, M., Notes on the tribe Mordellini (Coleoptera, Mordellidae) of Japan, 4.

で尾節の約2倍かそれよりやや短く、端へ強く狭まる；尾節は雄では腹面の大部分が広く凹み、端はほぼ切断され、雌では厚みがあるが下面は平坦；雄交尾器側葉片の左片の膜質突起は基片と水平に伸びるが、基片両側は内方へ強く反り、右片は膜質突起基部のくびれが弱く、基片肩部の張り出しをほとんど欠く。日本ではオオシマオビハナノミとクサマオビハナノミの2種が知られ、また中国から東南アジアにかけて数種が得られている。

コオビハナノミグループ：前グループによく似るが、小型種が多く、体は短くて丸み強い；鞘翅は基部紋、中央前方に環状紋、後方に帯をもつが、後2者は連結しない；尾節板と尾節は前グループに似るが、雌の尾節は厚みが少ない；雄交尾器側葉片の左片は基片両側の反りが弱く、右片は基片肩部の張り出しが多少とも弱い明らか。日本ではコオビハナノミとマキハラオビハナノミの2種が知られるにすぎないが、中国から台湾、東南アジアには多数の種が分布しているようである。

台湾オビハナノミグループ：鞘翅は基部ないし大部分が黄褐～赤褐色、基部紋は単純または不明瞭、中央～中央前方に環状紋、後方に帯をもつ；尾節板は雄で尾節の約2倍かそれ以下、しばしば背面の隆起は緩く、また端方でふつう細い；尾節は雄では腹面が縦長に凹み、端はほぼ切断され、雌では厚みがあり、やや膨隆ないしやや平坦；前肢はしばしば全体が褐色系；雄交尾器側葉片の左片の膜質突起は基片と水平に伸びるが、基片両側は内方へ強く反り、右片は膜質突起基部のくびれが非常に強く、その直後はコブ状に顕著に膨隆し、基片は前方に大きく丸く張り出し、付属枝はしばしば強く平圧される。日本では台湾オビハナノミ、サトウオビハナノミ、ウエノオビハナノミの3種が知られ、中国から台湾、東南アジアにかけても多くの種が得られている。

ビクオビハナノミグループ：光沢が非常に強く、本属としては鞘翅の点刻が浅くてまばら、微毛はふつうやや斜立した剛毛がまばらに生える点で、かなり異質なグループと思われる；体は長く、後方へほぼまっすぐ狭まる；鞘翅は大部分が栗～濁黄褐色、明瞭な基部紋を欠く；尾節板は雄で尾節の約2倍に満たず、背面の隆起は緩く、端はふつう幅広く切断状（日本産は幅狭い）；尾節は雄では腹面端半が凹み、端はほぼ切断状、雌ではやや膨隆する；雄交尾器側葉片は頑強、左片の膜質突起は基片に対し直角に伸び、右片は膜質突起基部のくびれが弱く、基片の肩部は顕著に突出、付属枝は基部の凹陷部が発達するとともにしばしば端前まで縦に凹む。日本ではビクオビハナノミだけを含むが、東南アジアには多くの種類を産する。

なお、本亜属に含まれる種類の雌雄差は外部形態でも明瞭で、次のような点により簡単に見分けられる。雄はより細型、頭部は金色微毛（雌ではふつう白色～淡色微毛）を密生し、触角はより細くて長く、

前脛節は内に曲がってその基部内方には斜立した長毛列を備え、尾節（腹部末端節）は多少とも顕著に凹陷（雌ではほぼ平坦か膨隆し、端はほぼ切断状）する。

オオオビハナノミ *Glipa (Macroglipa) shirozui* NAKANE

*Glipa shirozui* NAKANE, 1949, Mushi, Fukuoka, 20: 39, fig. 1.

体長10.7-16.5 mm。大型で非常に細長く、鞘翅はほぼ全体が黄褐色味を帯び、鋼状光沢が強く、斑紋は金色微毛から成る。尾節板は強く細まり、端はきわめて狭い。

日本では本州北部から屋久島にかけて広く分布し、これまでに記録されていない府県は秋田、茨城、栃木、埼玉、千葉、神奈川（未発表採集例あり）、長野、愛知、大阪、鳥取、香川、徳島、長崎、宮崎、鹿児島だけである。次種とは異所（側所）的な分布傾向を示しており、次種の分布圏ではともかく、それ以外の府県では今後に見られる可能性が高い。

主にブナ帯に生息するが、東京都高尾山、奈良県春日山、岡山県臥牛山、伊豆御蔵島など照葉樹林のよく残った場所でも記録されている。ブナなどの倒木や伐採木上の個体を採集する例が多いが、琉球列島における本属のもののように林内の葉上に飛来することもある。

台湾からは亜種 *G. shirozui takashii* NOMURA が知られていたが、そのタイプ標本を検したところ、台湾オビハナノミ *G. formosana* PIC のことであった。ただし、台湾には真のオオオビハナノミも1雌採集されている。（以上、TAKAKUWA, 1999.）

分布：本州、四国、九州〔基準産地〕、屋久島；台湾、中国、海南島。

アヤオビハナノミ *Glipa (Macroglipa) ohgushii* (CHŪJŌ)

*Neoglipa ohgushii* CHŪJŌ, 1957, Mushi, Fukuoka, 30: 2, fig. 1.

体長10.2-13.5 mm。体は後方へそれほど狭まらず、鞘翅はまったく黒色、斑紋は基本的には前種と同じパターンだが、白色微毛から成り、また後方の帯は会合部沿いに基半紋とつながる。



図2. ホウロクイチゴの葉上に飛来したオオオビハナノミ *Glipa (Macroglipa) shirozui* NAKANE, ♂ (屋久島)。



図3. オオオビハナノミ *Glipa (Macroglipa) shirozui* NAKANE の日本における分布.

図4. アヤオビハナノミ *Glipa (Macroglipa) ohgushii* (CHŪJŌ) の分布.

図5. アヤオビハナノミ *Glipa (Macroglipa) ohgushii* (CHŪJŌ), ♂ (宮崎県小林市いでの山産). a: 交尾器中葉片, b: ditto, 端側面, c: 交尾器側葉片 (左, 内面), d: ditto (膜質状突起, 右側面), e: 交尾器側葉片 (右, 内面), f: ditto (付属枝, 左側面), g: 第8腹板. Scales: 1 mm.

九州から本州西南部にかけて分布する。本州では紀伊半島(和歌山県)と東海地方(愛知, 静岡, 山梨県)に限って分布が知られ(中根, 1957は‘近畿の標本をみている’としている), 東限はいまのところ山梨県下部町である。四国では愛媛県だけから知られている(未発表)ようであり, また九州本土(大分, 宮崎, 熊本県)では主に南部に分布している。日本昆虫大図鑑での奄美大島の記録(野村, 1963)はオオシマオビハナノミの誤りである。シイ・カシ帯だけから発見されており, プナ帯までは生息していないようだが, なぜか前種とは異所(側所)的な分布傾向を示しており, 現在までのところ同所的な分布が知られているのは対馬だけ(大星山で両種とも採集されている)である。近年になって東海地方での採集例が増加し, 豊橋市ではタブノキ朽木中から得られたという。また, 杉本可能氏によれば, 静岡県下ではネムノキの材やヤナギの倒木に飛来したという。的場(1996)はカラスザンショウの花に飛来したと記しているが, たまたま得られただけで花粉や花蜜を後食していたのではないと思われる。なお, 北隆館の大図鑑(野村, 1963)で本種として図示されているのはオオシマオビハナノミのことである。

分布: 本州(山梨県以西), 九州[基準産地], 対馬。

ザウテルオビハナノミ *Glipa (Macroglipa) sauteri* PIC

*Glipa Sauteri* PIC, Dt. ent. Natn. Biblthk, 2: 189.

*Glipa masatakai* CHŪJŌ, 1960, Niponius, Takamatsu, 1(8): 1, fig.

体長10.5-14.5 mm, ただし8.5 mmという超小型個体も検している。鞘翅の斑紋は前2種と同一のボタンで, 後方の帯は八状, 基半紋とはつながらない。なお, 鞘翅基部辺には後2種に見るような金栗色微毛を生じる個体がある点は, それらとの近縁性を示唆している。

琉球列島から東南アジアにかけて広く分布する。琉球列島ではクワズイモやホウロクイチゴなど葉上に発見が容易で, それぞれの分布地で得られている個体数はかなり多いにもかかわらず, 不連続な分布ボタンを示していることは実に興味深い。なお, 筆者の手元にはトカラ列島諏訪ノ瀬島のラベルのついた標本があるが, その採集者に確認したところ採集した記憶がないとのことで, ここでは分布に挙げないでおく。追加採集例を待ちたい。

分布: 屋久島, トカラ列島中之島, 奄美大島, 石

垣島;台湾[基準産地],中国南部,海南島,ベトナムほか東南アジア各地(フィリッピンを除く).

オガサワラオビハナノミ *Glipa (Macroglipa) ogasawarensis* Kôno

Kôno, 1928, Trans. Sapporo nat. Hist. Soc., 10: 32, fig. 2A.

体長 8.5-11 mm. 鞘翅は基部と後方を除いて金~金栗色微毛でおおわれるが,中央~中央前には後方に白紋を伴った黒色部を現す. その独特な色彩で特異な感じを受けるが,斑紋ボタンを含めて前3種との形態的な差は少ない.

小笠原の父島と母島から知られる. 林縁の葉上に飛来した個体が得られているが,採集例はごく少ないようである. 松村(1931)が本種として図示しているのはコオビハナノミである.

分布:小笠原[基準産地](父島・母島).

クサカベオビハナノミ *Glipa (Macroglipa) sp. 1*

体長 11.2 mm. 前種によく似た色彩ボタンを示すが,検索表に示した違いのほか,明らかに尾節板が細い点でも別種と判断される.

現在までのところ,1998年の奄美大島産の1雌を知るにすぎない. 採集者の日下部良康氏によれば,神屋原生林のヤマモモと思われる立ち枯れ上から得たという. 筆者の手元には北ベトナム産の酷似した未同定種があるが,これとの関係は奄美大島産の雄個体を検してから決定したい.

分布:奄美大島;北ベトナム?.

カルベオビハナノミ *Glipa (Macroglipa) karubei* TAKAKUWA

*Glipa karubei* TAKAKUWA, 1993, Bull. Kanagawa prefect. Mus. (Nat. Sci.), (22): 92, figs. 1-7.

体長 7.7-8.8 mm. 背面はほとんど全体黒色で明瞭な条紋を欠き,尾節板は非常に短く太い点で特異である. 鞘翅の紋は,雄では金色微毛から成るもののかすかに認められる程度にすぎないが,雌では淡

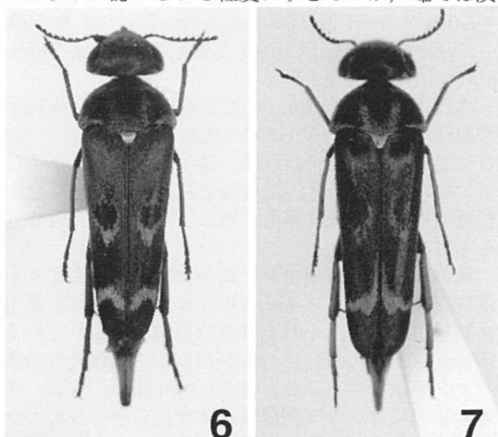


図6. オガサワラオビハナノミ *Glipa (Macroglipa) ogasawarensis* Kôno, ♀.

図7. クサカベオビハナノミ *Glipa (Macroglipa) sp.*, ♀.

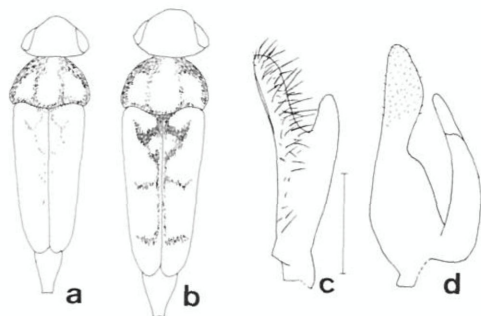


図8. カルベオビハナノミ *Glipa (Macroglipa) karubei* TAKAKUWA. a: ♂背面の淡色紋, b: ♀背面の淡色紋, c: 交尾器側葉片(左, 内面), d: ditto(右, 内面). Scale: 0.5 mm. (TAKAKUWA, 1993)

色微毛による不明瞭な帯となって現れる. 形態的に次グループやイリエオビハナノミグループに近い面もあるが,鞘翅には端紋を現さないなど斑紋ボタンはまったく異なる.

屋久島だけから知られる. 最初は1972年に長尾悟氏によって小揚子林道から1雄が採集されたものの,その消失しかかった不明瞭な斑紋からは異常型の可能性があり,やむなく記載を見合わせていた. その後しばらく採集例がなかったが,1992年になってようやく大川林道から松本浩一博士と菊部治紀氏により3雄1雌が再発見され,確信をもって記載することができたという経緯がある. 筆者は原記載に使用された上記5頭以外の標本を知らない.

分布:屋久島[基準産地].

ワモンオビハナノミ *Glipa (Macroglipa) apicalis* PIC

*Glipa apicalis* PIC, 1922, Melanges exot.-Ent., 37: 21.

*Glipa (Macroglipa) shibatai* NAKANE, 1960, Ent. Rev. Japan, 12: 17, pl. 4, figs. 7, 8.

体長 9.5-13 mm. 従来,日本産には本種に対し *shibatai* の名を当ててきたが, HORÁK (1994) はこれをインドシナの種のシノニムとした. 本州産や琉球列島産,インドシナ産の個体群は,互いに雄交尾器側葉片右片の付属枝先端の形にわずかな違いが認められるほか,斑紋の出現傾向もいくらか異なる(インドシナ産は基部紋と中央環状紋は合全部でつながる傾向が強い)ものの,亜種レベルで区別する必要を感じない.

局地的な分布を示し,本州では福井県名田庄村・高浜町,奈良県春日山(*shibatai*の基準産地),和歌山県中辺路町,山口県川上村の5カ所のみから記録され,四国と九州を飛ばして琉球列島に分布する. 和歌山県と山口県では各1例だけだが,奈良県春日山では個体数が多く,福井県でもかなりの数が得られている. また,琉球列島ではクワズイモの葉上に姿を認めることが多く,どの分布地でも個体数は多く得られているが,沖縄島ではふしぎなことに,北部の与那のごく狭い地域でしか採集されていないよ

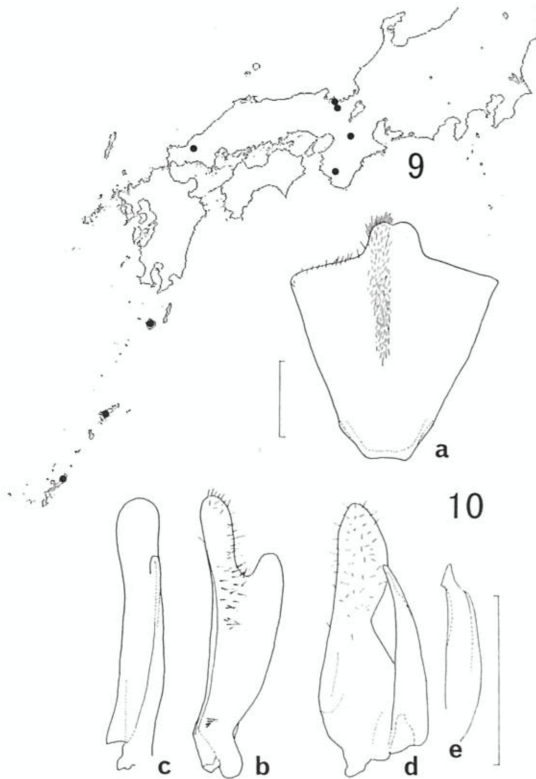


図9. ワモンオビハナノミ *Glipa (Macroglipa) apicalis* Pic の日本における分布。

図10. ワモンオビハナノミ *Glipa (Macroglipa) apicalis* Pic, ♂ (福井県産)。a: 第8腹板, b: 交尾器側葉片 (左, 内面), c: ditto (右側面), d: 交尾器側葉片 (右, 内面), e: ditto (付属枝, 左側面)。Scales: 1 mm.

うである。和歌山県ではモミの立ち枯れ木より得られている。

分布: 本州 (福井県以南), 屋久島, 奄美大島, 沖縄島, 石垣島, 西表島; 中国南部, 海南島, 北ベトナム, ラオス [基準産地], タイ北部。

キンモンオビハナノミ *Glipa (Macroglipa) asahinai* NAKANE & NOMURA

*Glipa asahinai* NAKANE & NOSURA, 1950, Trans. Kansai ent. Soc., 15: 3, fig. 2.

体長 6.5-8.5 mm. 和名のとおりに黒地にあざやかな金紋を備えた美しい種である (図1)。その斑紋だけを見ると, 本属にあってきわめて特異な種のように感ずるが, 形態的には前種にきわめて近く, 雄交尾器もほとんど違わない。また鞘翅の金紋は, 前種における淡黄~橙黄色微毛が橙金色に置き変わるとともに, 基部後方紋は内方へ縮小し, 逆に環状紋は内方へ広がったもの (派生形質) と見なすことができる。ただし, 頬の形が異なるほか, 鞘翅はより細く, 尾節板は後方にまっすぐ細まり, また後胸両

側の膨らみは強い点などで明らかに異なっている。小笠原に分布するが, 採集例は原記載に使用された2頭と, 1976年に採集された8頭 (高桑, 1985) 以外には知らない。とくに父島からは知る限りでは1976年の1例だけである。

分布: 小笠原 (父島, 母島 [基準産地])。

イリエオビハナノミ *Glipa (Macroglipa) iriei* TAKAKUWA

*Glipa iriei* TAKAKUWA, 1977, Elytra, Tokyo, 5: 9, figs. 1-2.

体長 8-10.7 mm.

琉球列島からインドシナにかけて知られる。石垣島と西表島では比較的得られているものの, それ以外での採集例はごく少ないと思われる。沖縄島, 台湾, 北ベトナム産とも基準産地の個体群とは斑紋などがいくらか異なるが, 亜種レベルで区別する必要を感じない。本属の中にあっても非常に敏捷で, 採

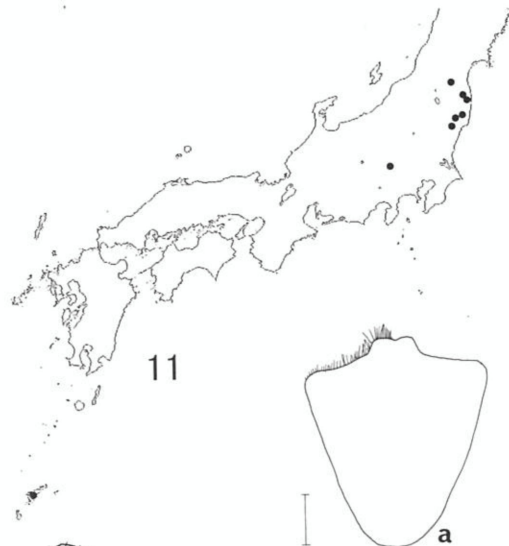


図11. オオシマオビハナノミ *Glipa (Macroglipa) oshimana* NOMURA の日本における分布。

図12. オオシマオビハナノミ *Glipa (Macroglipa) apicalis* Pic, ♂ (福島県産)。a: 第8腹板, b: 交尾器側葉片 (左, 内面), c: ditto (右側面), d: 交尾器側葉片 (右, 内面), e: ditto (付属枝, 左側面)。Scales: 0.5 mm. (TAKAKUWA, 1999)

集は容易でない場合がある。新里達也氏は石垣島において樹冠近くの枝上を移動する個体2頭を採集しているが、この観察例は筆者の考えた本亜属の行動パターン(本誌126号3頁)を支持する。

分布: 沖縄島, 石垣島 [基準産地], 西表島; 台湾, 北ベトナム。

オシマオビハナノミ *Glipa (Macroglipa) oshimana* NOMURA

*Glipa oshimana* NOMURA, 1966, Ent. Rev. Japan, 18: 41, pl. 5, fig. 1.

体長8-9 mm, 台湾産はいくらか大型。

日本と台湾, 中国から知られる。日本では特異な分布型を示しており, 本州中央部のブナ帯(福島県, 茨城県, 埼玉県)と奄美大島だけで記録されているにすぎない。本州産と奄美大島産とがどのような個体群関係にあるのかは, 後者の雄個体を検していないために確認できていないが, 雌同士と比較では斑紋差などにわずかな違いが認められる程度である。前者の地域では阿武隈山地南部での採集例が比較的多く, また福島市茂庭や埼玉県大滝村のような内陸部山間でも得られている。奄美大島での採集例もごくわずかなだけのようであり, 筆者は1999年に本

種の雌をネットインしながらも毒管に入れる際に逃がした苦い思い出がある。なお, 北隆館の大図鑑(野村, 1963)で *G. ohgushii* として図示されているのは本種である。

分布: 本州(中央部), 奄美大島 [基準産地]; 台湾, 中国。

クサマオビハナノミ *Glipa (Macroglipa) kusamai* TAKAKUWA

*Glipa (Macroglipa) kusamai* TAKAKUWA, 1999, Elytra, Tokyo, 27: 66, figs. 1-2, 5-13.

体長7-8.8 mm。前種に一見よく似るがいくらか小型, 検索表に示したように背面の紋の色彩(本種は金黄色)と鞘翅後方の帯がジグザグ状なこと, 尾節板は短くてほぼ1色なことと区別され, さらに福島県産の前種と比較する限りでは雄交尾器が明らかにより大きく(体は小さいのに!), 側葉片右片の付属枝は非常に長く先端が細いなど, きわだった差異が認められる。

沖縄島のみから知られる。いまのところ, 北部での少数の採集例があるにすぎない。

分布: 沖縄島 [基準産地]。

(神奈川県立生命の星・地球博物館)

#### ○ピットフォールトラップで採集されたチャイロヒメタマキノコムシ

著者らは今年8月, 大分県湯布院町において, さなぎ粉と紙コップを用いたピットフォールトラップによって, 本来キノコ食のチャイロヒメタマキノコムシ *Pseudoliodes strigosulus* (PORTEVIN) を採集した。本種がピットフォールトラップで採集されるのはおそらく今回が初めてと思われるので報告する。なお, 詳細な採集データは次のとおりである。1頭, 大分県湯布院町川北, 14. VIII. 1999, 山内健生, 保科英人採集。

本個体が採集された場所は, 交通量の多い車道近くのスギ植林であったが, 広葉樹の低木や倒木もあり, また同日にピーティングで数種類のデオキノコムシも採集されているので, 菌食性の甲虫類も少なからず生息している林であろうと思われる。

ところで, ピットフォールトラップでタマキノコムシが採集されるのは, 今回が初めてではない。著者の一人, 保科は, 愛知県からピットフォールトラップで採集された, オチバヒメタマキノコムシ *Dermatohomoeus terrenus* (HISAMATSU) を検したことがある。このオチバヒメタマキノコムシは, 落葉層生活者であり, 地面に仕掛けたピットフォールトラップに落ちたことはそう不思議なことではない。

しかし, 今回報告するチャイロヒメタマキノコムシは, 落葉中のカビではなく地上に生えるキノコを食しているタマキノコムシである。本種は飛翔能力を有しており, また, 保科の観察によると歩行能力に秀でているわけでもないので, 採餌場所への移動は歩行ではなく飛行によってなされていると思われ

る。したがって, 今回採集された個体は単純に, さなぎ粉に誘引されて飛来したものと考えるのが普通であろうが, 本来キノコ食の本種が, はたしてさなぎ粉に誘引されるのであろうか。

実は, 地上生活者の本種が冬期, 落葉中からツルグレン装置によって採集されることがある。これは冬期休眠個体と思われるのだが, 実は活動期である春~秋にかけても, ごく希に本種はツルグレン装置で採集されることがある。そのため, 本種は春~秋の活動期であっても, 生活史の一部を落葉中で過ごしている可能性もあり(例えば, 蛹期や夜間の休息など)今回採集された個体は, さなぎ粉に誘引されたかどうかは別にして, 何らかの理由で落葉中にいた本種がトラップに落ちたものという可能性が高いのではなかろうか。本種の生活史解明は, 今後の研究課題としたい。

なお, 保科(1999)は, *Pseudoliodes* 属は本種を含め, 対応する学名に問題があることを提起したが, 今回は久松(1985)で扱われた従来の学名・和名を踏襲した。

#### 参考文献

- 久松定成, 1985. 上野俊一他編, 原色日本甲虫図鑑, 2: 233-237, pl. 42, 保育社。  
保科英人, 1999. 日本産タマキノコムシ科 *Pseudocolenis*, *Pseudoliodes* 両属の分類学的諸問題. 甲虫ニュース, (125): 5-7。  
(九州大学大学院比較社会文化研究科, 山内健生)  
(九州大学農学部昆虫学教室, 保科英人)

静岡県浜松市松島町におけるゲンゴロウ類の採集記録  
—本州初記録のニセコケシゲンゴロウを中心として—

北野 忠・記野直人・長谷川 洋・北山 昭

静岡県浜松市松島町は天竜川河口の右岸側に位置している。当地には海岸線に沿って大小いくつかの池があり、これらにはヨシ、ガマ、ヒシ類の他多くの水生植物が繁茂している。

筆者らは、当地で本州初記録となるニセコケシゲンゴロウ、ホソマルチビゲンゴロウをはじめとするゲンゴロウ類 18 種を採集した。今回これらの採集記録をまとめたので報告する。なお、以下の報告の一部は北野・石田(2000)の内容と重複するものがある。報告にあたり種々ご教示いただいた森正人氏にお礼申し上げる。

コップゲンゴロウ科 Noteridae

1. キボシチビコップゲンゴロウ *Neohydrocoptus bivittis* (MOTSCHULSKY, 1859) (写真 1)

1 頭, 12. X. 1999, 北野採集。

1 個体のみ記録である。国内での記録は極めて少なく、従来愛知県知多半島、奈良県橿原市、静岡県桶ヶ谷沼のみから記録されていたが(阿部, 1988; 佐藤, 1985; 森・北山, 1993)、近年京都市深泥ヶ池、千葉県佐倉市(信太, 1998)でも得られている。

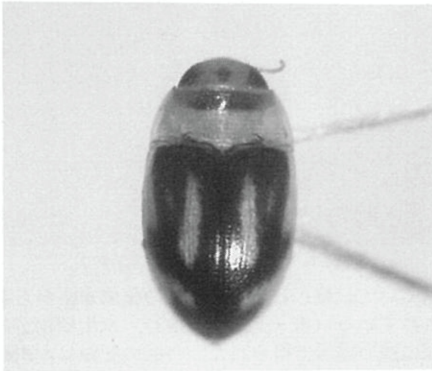


写真 1. キボシチビコップゲンゴロウ

2. コップゲンゴロウ *Noterus japonicus* SHARP, 1873

1 頭, 3. V. 1999; 1 頭, 21. V. 1999; 3 頭, 12. X. 1999; 2 頭, 17. X. 1999; 1 頭, 19. XI. 1999, 以上北野採集; 2 頭, 30. X. 1999; 6 頭, 20. XI. 1999; 2 頭, 4. XII. 1999, 上記野採集; 19 頭, 20. XI. 1999; 21 頭, 4. XII. 1999, 以上長谷川採集。

水生植物が多く水深の浅い場所で多く見られる。

なお、本種はこの他多数見られた。

3. ムツボシツヤコップゲンゴロウ *Canthydrus politus* (SHARP, 1873)

4 頭, 3. V. 1999; 4 頭, 21. V. 1999; 2 頭, 12. X. 1999; 1 頭, 19. XI. 1999, 以上北野採集; 11 頭, 30. X. 1999; 19 頭, 20. XI. 1999; 5 頭, 4. XII. 1999, 上記野採集; 55 頭, 20. XI. 1999; 28 頭, 4. XII. 1999, 以上長谷川採集。

本種の分布は局地的であるが生息地での個体数は比較的多いとされている(森・北山, 1993)。当地でも水生植物が多く水深の浅い場所で多く見られた。

ゲンゴロウ科 Dytiscidae

4. ケシゲンゴロウ *Hyphydrus japonicus* SHARP, 1873

2 頭, 17. X. 1999; 10 頭, 19. XI. 1999, 以上北野採集; 1 頭, 30. X. 1999; 6 頭, 20. XI. 1999, 上記野採集; 1 頭, 20. XI. 1999, 長谷川採集。

5. ニセコケシゲンゴロウ *Hyphydrus orientalis* CLARK, 1863 (写真 2)

10 頭, 12. X. 1999; 9 頭, 17. X. 1999; 31 頭, 19. XI. 1999, 以上北野採集; 20 頭, 20. XI. 1999; 4 頭, 4. XII. 1999, 上記野採集; 4 頭, 20. XI. 1999; 3 頭, 4. XII. 1999, 以上長谷川採集。

ヨシやガマ類が繁茂する池の水深の浅い場所で得られた(写真 3)。本州初記録である。採集時は全てケシゲンゴロウであると思っていたが、雄交尾器の形態から、ニセコケシゲンゴロウと同定した。ケシゲンゴロウとは外見上の区別は困難であるが、雄交尾器の形態から容易に区別できる(写真 4)。なお、本種の雄とケシゲンゴロウの雄が採集できた池はそれぞれ異なっており、同所的には確認できなかったことから両者は棲み分けをしていると考えられた。また、雌に関してはケシゲンゴロウと確実に区別するのは困難であったため、ケシゲンゴロウ、ニセコケシゲンゴロウの雄と同じ池で採集した雌をそれぞれの種とした。

本種は、国内では沖縄本島、西表島、与那国島で記録されているにすぎず(森・北山, 1993)、なぜこのような分布を示すのかたいへん興味深い。

なお、今回得られた雌はすべて背面がつや消し状で光沢を欠くが、与那国島産の個体では検し得たすべての雌が雄同様の光沢を有するものであった。また、雄の前・中跗節の膨らみが大きい、雌雄とも個体変異が著しいものの当地の個体のほうが黒化する傾向が強い等の差異が認められた。

6. コマルケシゲンゴロウ *Hydrovatus acuminatus* MOTSCHULSKY, 1859

1 頭, 3. V. 1999; 1 頭, 12. X. 1999, 以上北野採集。

本種の分布はやや局地的である。水生植物が多く



写真2. ニセコケシゲンゴロウ



写真3. ニセコケシゲンゴロウが見られた池

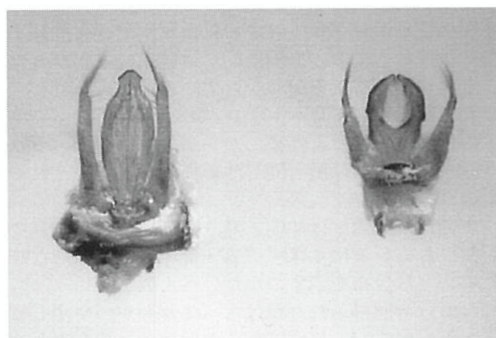


写真4. 雄交尾器(左, ケシゲンゴロウ, 右, ニセコケシゲンゴロウ)

水深の浅い場所でコップゲンゴロウに混じって得られた。この地域では2個体を確認したのみであり、まれな種であると考えられる。

7. オオマルケシゲンゴロウ *Hydrovatus bonvouloiri* SHARP, 1882

2頭, 3. V. 1999; 2頭, 21. V. 1999; 2頭, 12. X. 1999, 以上北野採集。

本種の分布も局地的で、いずれの生息地でも個体数は少ない。前種同様、水生植物が多く水深の浅い場所で、コップゲンゴロウに混じって得られた。

8. チャイロチビゲンゴロウ *Liodessus megacephalus* (GSCHWENDTNER, 1931)

4頭, 17. X. 1999, 北野採集; 34頭, 20. XI. 1999; 4頭, 4. XII. 1999, 以上記野採集; 9頭, 20. XI. 1999; 9頭, 4. XII. 1999, 以上長谷川採集。

本種は海岸沿いの塩分の混じる水域に生息することが知られている。この地域は海岸沿いにあるものの塩分はほとんど入っていないと考えられる。冬期に多く見られた。

9. チビゲンゴロウ *Hydroglyphus japonicus* (SHARP, 1873)

3頭, 12. X. 1999; 3頭, 17. X. 1999, 以上北野採集; 21頭, 20. XI. 1999; 17頭, 4. XII. 1999, 以上記野採集; 5頭, 20. XI. 1999; 21頭, 4. XII. 1999, 以上長谷川採集。

10. ホソマルチビゲンゴロウ *Leiodytes miyamotoi* (NAKANE, 1990) (写真5)

3頭, 3. V. 1999, 北野採集; 1頭, 20. XI. 1999, 記野採集; 1頭, 4. XII. 1999, 長谷川採集。

本種は中根(1990)によって福岡県産の雄2個体



写真5. ホソマルチビゲンゴロウ

に基づいて記載された種で、その後熊本県からも記録されている(森・北山, 1993)。水生植物が多く水深の浅い場所で得られた。今回の記録は本州初記録である。今回得られた個体は、外形等がホソマルチビゲンゴロウと区別ができず、本種と同定したが、熊本県産の個体と比較して背面の光沢が鈍いなどの差異があり、今後精査が必要である。

11. ツブゲンゴロウ *Laccophilus difficilis* SHARP, 1873

1頭, 3. V. 1999; 6頭, 21. V. 1999; 9頭, 12. X. 1999; 16頭, 17. X. 1999; 5頭, 19. XI. 1999, 以上北野採集; 10頭, 30. X. 1999; 23頭, 20. XI. 1999; 2頭, 4. XII. 1999, 以上記野採集; 21頭, 20. XI. 1999; 16頭, 4. XII. 1999, 以上長谷川採集。

12. コウベツゲンゴロウ *Laccophilus kobensis* SHARP, 1873



3 頭, 20. XI. 1999, 記野採集; 3 頭, 20. XI. 1999, 長谷川採集.

13. ルイスツブゲンゴロウ *Laccophilus lewisii* SHARP, 1873

7 頭, 21. III. 1998; 1 頭, 3. V. 1999; 6 頭, 21. V. 1999; 6 頭, 12. X. 1999; 56 頭, 17. X. 1999; 8 頭, 19. XI. 1999, 以上北野採集; 5 頭, 30. X. 1999; 16 頭, 20. XI. 1999; 1 頭, 4. XII. 1999, 以上記野採集; 8 頭, 20. XI. 1999, 長谷川採集.

個体数は多い.

14. キベリクロヒメゲンゴロウ *Ilybius apicalis* SHARP, 1873

3 頭, 3. V. 1999; 1 頭, 21. V. 1999; 1 頭, 12. X. 1999; 2 頭, 19. XI. 1999, 以上北野採集; 1 頭, 30. X. 1999; 1 頭, 4. XII. 1999, 以上記野採集; 1 頭, 20. XI. 1999, 長谷川採集.

15. ヒメゲンゴロウ *Rhantus suturalis* (MAC LEAY, 1825)

2 頭, 30. VIII. 1998; 1 頭, 12. X. 1999, 以上北野採集; 1 頭, 4. XII. 1999, 記野採集.

普通種であるが, この地域での個体数は少ない.

16. ハイイロゲンゴロウ *Eretes sticticus* (LINNAEUS, 1767)

2 頭, 30. VIII. 1998, 北野採集.

池の脇の湿地から得られた.

17. コシマゲンゴロウ *Hydaticus grammicus* (GERMAR, 1830)

1 頭, 12. X. 1999; 1 頭, 19. XI. 1999, 以上北野採集.

本種も普通種であるが, この地域での個体数は少ない.

18. ウスイロシマゲンゴロウ *Hydaticus rhantoides* SHARP, 1882

1 頭, 21. V. 1999; 2 頭, 12. X. 1999; 1 頭, 19. X. 1999, 以上北野採集; 1 頭, 30. X. 1999, 記野採集; 2 頭, 20. XI. 1999, 長谷川採集.

今回 18 種のゲンゴロウ類が採集できたが, 一地域あたりの種数としてはかなり多い数ではないかと思われる. また, これらゲンゴロウ類の他に, ババアメンボ, エサキアメンボ, ホッケミズムシなどの希少な水生昆虫が生息していることから, 当地は止水性水生昆虫の生息場所としてたいへん良好な環境であるといえる.

なお, 当地は迷トンボの産地としても有名で, 台風一過には多くのトンボ採集者が集う. これらの池は止水性の水生生物にとって良好な生活環境であり, かつ海岸線沿いにあることを考えると, 迷トンボだけでなく南方から飛ばされ, または流されてきた他の水生生物が棲みつための好条件がそろっている場所であるといえる. また, 静岡県浜松市は温暖な気候でもあることから, 何らかの原因で南方からこの地に運ばれたニセコケシゲンゴロウが生息していることも考えられないことではない. しかし,

前述のように少なくとも与那国島産の個体群とは雄の前・中跗節の形態や, 雌の背面の光沢が異なるので, むしろ個体群が隔離されてかなりの時間が経過しているように思われ, いずれ分類学的な検討が必要であると考えられる.

一般に普通種とされるケシゲンゴロウは, 本州産の既知の近似種とは外見からの区別が容易であったことと, 外見からは区別が困難なニセコケシゲンゴロウとは従来分布域が大きく異なっていることから, 採集されても雄交尾器を確認することは少ないと思われる. このことから, 筆者らは今回, 青森県車力村, 秋田県仁賀保町, 新潟県大島村, 千葉県君津市, 奈良県月ヶ瀬村, 兵庫県加西市, 岡山県作東町, 島根県浜田市産のケシゲンゴロウ類を精査したが, すべてケシゲンゴロウであった. しかし, 他の地域で記録されたケシゲンゴロウの中にニセコケシゲンゴロウが混じっている可能性は十分にあるので, さらに多くの産地のケシゲンゴロウ類を精査する必要があると思われる. 各地方でのケシゲンゴロウとニセコケシゲンゴロウの分布状況が明らかになることを願う次第である.

#### 参考文献

- 阿部光典, 1988. ゲンゴロウ類の分布に関するメモ. 甲虫ニュース, (83/84): 5-6.  
 北野 忠・石田和男, 2000. 遠州地方で確認された水生鞘翅目. 遠州の自然, (23): 9-14.  
 森 正人・北山 昭, 1993. 図説日本のゲンゴロウ. 217 pp. 文一総合出版, 東京.  
 中根猛彦, 1990. 日本の雑甲虫覚書 6. 北九州の昆虫, 37 (2): 61-64.  
 佐藤正孝, 1985. コップゲンゴロウ科, ゲンゴロウ科. 上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝編, 原色日本甲虫図鑑, 2: 182-201. 保育社, 大阪.  
 信太利智, 1998. 佐倉市で採集した水生甲虫. 房総の昆虫, (20): 1-3.

(北野: 静岡県清水市)

(記野: 埼玉県所沢市)

(長谷川: 東京都武蔵野市)

(北山: 大阪府吹田市)

#### ○静岡県における *Ochyromera pieridis* (ゾウムシ科) の採集例

*Ochyromera pieridis* は神奈川県および愛媛県産の 10♀ に基づいて記載された種である (KOJIMA *et al.*, 1998). 非常に隔たった 2 産地から記録されているため, その間を埋める地域における分布が予想されていた. 最近, 筆者は東京農大の島田孝氏のご好意により静岡県産の本種を検査する機会に恵まれた. データは以下の通りである.

1♀, 静岡県天城湯ヶ島町天城山御幸林道, 16. VIII. 1999, 島田孝採集.

末筆ながら, 貴重な標本を恵与下さった島田孝氏に感謝の意を表したい.

(九州大学, 吉武 啓)

## ○ススキクチヒゲアリツカムシの採集例

*Poroderus similis* (SHARP) ススキクチヒゲアリツカムシ(和名新称)は1874年SHARPによって長崎より記載され、これまで広島県(岡本・野村, 1988), 佐賀県(野村, 1996)や栃木県(稲泉ら, 1997)より記録があり, ススキのリターより得られることが知られている。

筆者らは, 埼玉県下で本種を採集しているので, 生息環境等も含めて報告する。  
1♂, 埼玉県東松山市岩殿, 28. III. 1999, 豊田浩二採集; 1♂, 同所, 3. IV. 1999, 新井志保採集, いずれも新井保管(図1)。



図1. 埼玉県産ススキクチヒゲアリツカムシ



図2. 採集環境

大きなススキの切り株にたまった, やや湿った土壌中より採集した(図2)。当地を含めた岩殿丘陵一帯には, 江戸時代に周辺の農家が利用した採草場が広範囲にわたって存在し, 昭和初期までは一面草地であったという。筆者らが採集した場所のススキは, いずれも直径1メートルに及ぶ古株であり, 以前のススキ原の名残のようである。通常, 新たに生育したススキは株も小さく, 根際にリターが積もるような余地が無いことから, 本種が安定した状態で生息できる環境は, ススキ原が永らく保たれてきた場所に限られるものと思われる。今後このような環境での採集により, さらに記録は増えると思われ

る。

末筆ながら, 日頃からご指導頂き, 本種に関しての情報を御教示頂いた国立科学博物館の野村周平博士に厚く御礼申し上げる。

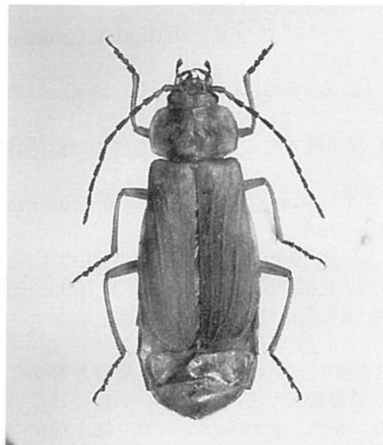
## 参考文献

- 稲泉三丸・小林隆人・香川清彦, 1997. 雑木林の落葉下で越冬する昆虫類. *インセクト*, 4(1): 13-23.  
野村周平, 1996. 佐賀県産土壌甲虫分布資料. *佐賀の昆虫*, (30): 721-727.  
岡本 巖・野村周平, 1988. 広島県産アリツカムシ科目録(第2報). *広島虫の会会報*, (27): 45-47.  
(東京農大, 新井志保; 埼玉県嵐山町, 豊田浩二)

## ○キイロシリプトジョウカイの採集例

*Yukikoa wittmeri* (NAKANE) キイロシリプトジョウカイは, 本州のみに分布が知られる稀種である。メス個体の腹部は上翅より大きくはみ出し, 一見して他種と識別できる特異な様相を呈している。筆者は本種を山梨及び埼玉県下より採集しており, 数少ない記録と思われるので報告する。

1♀, 15. VI. 1997, 山梨県丹波山村後山川三条の湯付近(標高1,000 m), 筆者採集, 奥島雄一保管(図); 1♀, 30. VI. 1999, 埼玉県大滝村中津川溪谷大山湖(標高1,200 m), 筆者採集, 保管。



採集したのはいずれも沢沿いの登山道脇で, 木漏れ日の当たる下草の葉上に静止している個体であった。このような採集例は永幡(1995)等でも報告されており, 本種の好む生息環境は山地の沢沿いのようである。なお, 本種は埼玉県下において得られたのはこれが初めてである。

末筆ながら, 本種についてご教示頂き発表を勧めてくださった倉敷市立自然史博物館の奥島雄一氏に厚く御礼申し上げる。

## 引用文献

- 永幡嘉之, 1995. キイロシリプトジョウカイを美方町で採集. *Iratsume*, (19): 21.  
(埼玉県嵐山町, 豊田浩二)

## フトツヤケシヒゲブトハネカクシの学名について

丸山 宗利\*

フトツヤケシヒゲブトハネカクシは、早春から初夏にかけて、砂浜に打ち上げられた海藻の下で採集される海浜性のハネカクシであり、北海道と本州に分布する。本種は中根(1963)によって *Aleochara variolosa* (WEISE, 1877) という学名のもとで初めて図示され、その後、柴田(1985)においても同様に扱われている。普通種であり、比較的同一しやすいためか、地域ファウナのリストにもよく登場する。

筆者の調査の結果、本種に *A. variolosa* の学名をあてることは適当でないことがわかったので、以下にその経緯を説明したい。近年、ASSING (1995) はヒゲブトハネカクシ族 Aleocharini に含まれるいくつかの海浜性の属を整理した。この論文において、*Aleochara variolosa* (WEISE, 1877) はツヤケシヒゲブトハネカクシ *Emplenota fusicola* (SHARP, 1874) (ここでは *Emplenota* が独立した属として扱われているが、実際には *Aleochara* の 1 亜属として扱われることが多い) の下位同物異名とされた。それでは一体、図鑑に示されているものは何者かという点、同論文中に登場する *Skenochara squalithorax* (SHARP, 1888) に相当する。*Skenochara* は BERNHAUER & SCHEERPELTZ (1926) によって本種をタイプとする *Aleochara* の新亜属として設立されたものであるが、ASSING (1995) はこれを属へ格上げしている。この学名はその後 MAUS (1998) によって、*Coprochara* 亜属の一員として *Aleochara (Coprochara) squalithorax* SHARP とされた。

上述をまとめると、フトツヤケシヒゲブトハネカクシの和名で上記の 2 つの図鑑(中根, 1963; 柴田, 1985) に図示解説されている種の学名は、正しくは *Aleochara (Coprochara) squalithorax* SHARP である(今後はこの和名と学名の組み合わせを踏襲されたい)。そして、それにあてられている *A. variolosa* (WEISE) という学名は既に有効ではなく、*A. (Emplenota) fusicola* SHARP のシノニムとなっている。

ヒゲブトハネカクシ属 *Aleochara* ハネカクシは、汎世界的に分布し、これまでに約 400 種が記載されている大属である。幼虫はハエの困蛹の内部寄生者

として知られ、本稿で扱った種も海岸に打ち上げられた海藻に発生するハエを宿主とするものと思われる。本属の種は、微小種が多いヒゲブトハネカクシ亜科 Aleocharinae のなかでもとりわけ大型のものが多く、腐肉によく集まるため採集される機会が多い。筆者は日本産本属の分類学的検討を進めているが、広汎な分布を持つ種がほとんどであり、大陸から記載された種との比較の必要があるなどの問題が山積しており、現時点での同定は、一部の種を除いて、依然として困難なままである。

末筆ながら、写真撮影の労を賜った北大昆虫体系学教室の溝田浩二氏、本文について有益な助言を下された同教室の八尾泉氏と大野豪氏には厚くお礼申し上げる。

## 参考文献

- ASSING, V., 1995. The Palaearctic species of *Emplenota* CASEY, *Polystoma* CASEY, *Triochara* BERNHAUER and *Skenochara* BERNHAUER & SCHEERPELTZ, with descriptions of three new species (Coleoptera, Staphylinidae, Aleocharinae). *Beitr. Ent.*, 45(1): 217-237.
- BERNHAUER, M., & O. SCHEERPELTZ, 1926. Staphylinidae VI. In JUNK, W., *Coleoptm. Cat.*, (82): 499-988.
- MAUS, Ch., 1998. Taxonomical contributions to the subgenus *Coprochara* MULSANT & REY, 1874 of the genus *Aleochara* GRAVENHORST, 1802 (Coleoptera, Staphylinidae). *Koleopt. Rdsch.*, 68: 81-100.
- 中根猛彦, 1963. ヒゲブトハネカクシ亜科. 中根猛彦編, 原色昆虫大図鑑, 2: 99-100, pl. 50. 北隆館.
- 柴田泰利, 1989. ヒゲブトハネカクシ亜科. 上野俊一他編, 原色日本甲虫図鑑 2: 318-321, pl. 56. 保育社.
- SHARP, D., 1874. The Staphylinidae of Japan. *Trans. ent. Soc. London*, 1874: 1-103.
- SHARP, D., 1888. The Staphylinidae of Japan. *Ann. Mag. nat. Hist.*, (6)2: 277-295.
- WEISE, J., 1877. Japanische Staphylinidae und Pselaphidae. In KRAATZ, G., Beiträge zur Käferfauna von Japan, meist auf R. HILLERS Sammlungen basiert. Erstes Stück. *Dt. ent. Z.*, 21: 88-100.
- (北海道大学大学院農学研究所昆虫体系学教室)

\* MARUYAMA, M., On the scientific name of the Japanese name "Futo-tsuyakeshi-higebuto-hanekakushi" which have been known as "*Aleochara variolosa* (WEISE, 1877)"

## ○サキシマクロナガゴメツキとオキナワフトナゴメツキの幼虫

石垣島には *Parallelostethus sakishimensis* サキシマクロナガゴメツキと *Orthostethus babai babai* オキナワフトナゴメツキの2種の Elaterini 族の大形種が分布している。これらは外形も異なるので識別は容易であるが、幼虫は類似していて、外形による識別は不明であった。

筆者は数年前よりこれらの幼虫の飼育をしてきたが、このたび両種とも成虫にすることができ、頭部などの脱皮殻も回収できたので、ここに両種の特徴がよく出ている触角を示した。

幼虫は両種とも図示(図1E)したような細長、円筒形状で、頭部と前胸背板は黒褐色、胴部は黄褐色(第9腹節はやや濃色)、体表面は平滑状で光沢を有する。第9腹節(図1のE↑)は円筒形状で末端にやや細まるが、末端はスムーズに湾曲して尖らない。

両種の触角による識別点は以下のようなものである。

◇触角の第1節は細長く、長さは幅の約1.5倍。第2節の下側面には円錐形状の感覚突起を15個内外生ずるが、感覚突起は下面に広く分布する。……サキシマクロナガゴメツキ(図1A-B)

◇触角の第1節は太短く、長さは幅の約1.2倍。第2節も短大で、下側面には15個内外の感覚突起を生ずるが、突起は末端部に集まって分布する。……オキナワフトナゴメツキ(図1C-D)

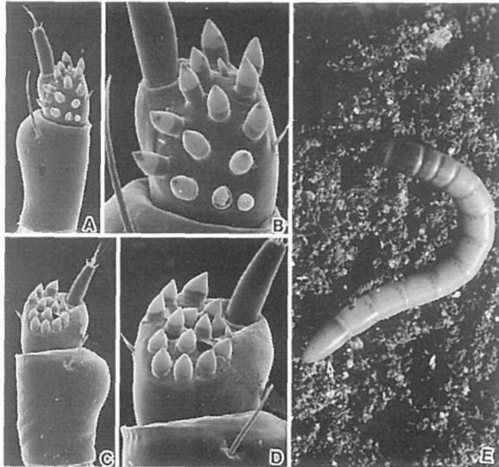


図1. A-B, サキシマクロナガゴメツキの右触角の下側面(A)と第2節の拡大(B)(脱皮殻). C-D, オキナワフトナゴメツキの左触角の下側面(C)と第2節の拡大(D)(脱皮殻). E, オキナワフトナゴメツキの老熟幼虫.

脱皮殻による他の頭蓋や口器の付属肢などの比較もしたが、破損などもあり、詳しい調査ができなかったため、今後は幼虫そのものを用いて、より詳しい形態を明らかにしたいと考えている。幼虫は朽

ち木や腐葉土中にいて、動きは活発であるが、捕食性はあまりないように思われる。老熟したものは体長50 mm内外に達する(図1E)。

終わりに、幼虫の採集について支援をいただいた石垣市川平の深石隆司氏に感謝の意を表する。

## 引用文献

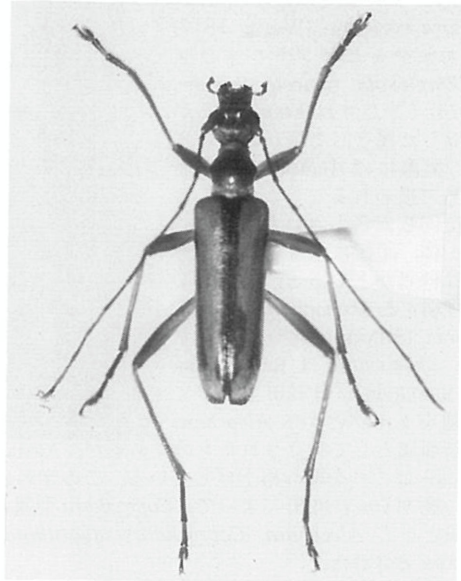
大平仁夫, 1997. 日本産オオナガゴメツキとその近似種について. 比叢科学, (182): 37-44, 5 pls.

大平仁夫, 1998. 日本産オオクロナガゴメツキ属とヒメクロナガゴメツキ属の種について. 比和科学博物館研究報告, (36): 43-47, 3 pls.

(愛知県岡崎市, 大平仁夫)

## ○大台ヶ原山からオオミネヒメハナカミキリを採集

オオミネヒメハナカミキリ *Pidonia (Pidonia) ohmimesana* MIZUNO, 1987 は、紀伊半島の大峰山系に特産し、山頂付近の針葉樹林帯に限って発見される(加藤他, 1995)。筆者は、大台ヶ原山のブナを



オオミネヒメハナカミキリ

中心とする落葉広葉樹林で本種を採集したので報告する。

1♂, 三重県多気郡宮川村大台ヶ原山(標高1,480 m), 7. VII. 1999, 筆者採集。

大峰山系の弥山や稲村ヶ岳の個体と比較して、黒色部の発達が弱く、頭部背面は黄褐色、前胸部背面は赤褐色、脚は黄褐色を呈する。

## 参考文献

加藤敦史・水野弘造・岩田隆太郎, 1995. 奈良県のカミキリムシ. 関西甲虫談話会資料, (10): 1-140.

(東京都世田谷区, 窪木幹夫)

○ヤマトヒゲトチビシテムシをアリの巣より採集  
ヒゲトチビシテムシ類はかつては独立の科として扱われてきたが、近年の分類体系ではタマキノコムシ科の1亜科とされる。この仲間の種はいずれも非常に稀なことで知られ、生態的な知見としてはアリの巣やキノコから採集されたり(久松, 1985)、夕刻の草原でのスウィーピングで得られる(西川, 1997)ことが知られる他、沢沿いのマレーズトラップに入っていた例もある(岸本氏私信)。いずれにせよ生態面では不明の部分が多く、このことがヒゲトチビシテムシ類の記録が極端に少ない大きな原因である。

筆者は好犠性甲虫を採集の際、ヒゲトチビシテムシ類をアリの巣中より採集しているので数少ない知見として報告する。

*Colon japonicum* HISAMATSU ヤマトヒゲトチビシテムシ 1♂, 30. V. 1999, 埼玉県東秩父村白石峠(標高 800 m 付近), 筆者採集・保管。

林道脇に落ちていた結晶片岩系の石下に形成された *Lasius niger* トビイロケアリの巣中より、幼虫室付近を徘徊していた個体を採集した。巣の内部でアリから攻撃を受ける様子はなかったものの、アリの巣内で何をしているのかについては観察することができなかった。本種は本州の萩市指月山で得られた2雄標本をもとに HISAMATSU (1970) により記載された種で、この標本は保育社の図鑑にも図示されている。なお、原記載には採集状況等の生態面に関する情報は記載されていない。

また、この巣内には、他の好犠性の甲虫類として *Diartiger fossulatus fossulatus* コヤマトヒゲトアリゾウムシが見られたことを付記しておく。

末筆ながら、文献およびマレーズトラップでの採集例をご教示いただいた東京農業大学の岸本年郎博士に厚く御礼申し上げます。

#### 引用文献

- HISAMATSU, S., 1970. A new Japanese species of *Coloniidae* (Coleoptera). *Trans. Shikoku ent. Soc.*, 10 (3/4): 127-129.  
久松定成, 1985. ヒゲトチビシテムシ科. 原色日本甲虫図鑑 (II), pp. 237-238. 保育社.  
西川正明, 1997. 丹沢山地動植物目録⑩シテムシ類とコガネムシ上科. 丹沢大山自然環境総合調査報告書, pp. 206-214. 神奈川環境部.

(埼玉県嵐山町, 豊田浩二)

#### ○東北地方におけるチビシギゾウムシの記録

チビシギゾウムシ *Curculio (Balanobius) chibi* は KÔNO (1930) により札幌産 1♂ と藻岩山産 1♀ に基づいて記載された。本種は北海道および本州に分布するが、本州からの記録は岐阜県から3例(野平, 1986; 1988; 1991)、長野・福島両県からの各1例(野平, 1997; 野平, 1991)が知られているにすぎない。筆者らは青森・山形・福島の3県で本種を採集しているので報告する。

1頭, 青森県東通村尻屋, 13. VI. 1992, 堀川採集; 1頭, 山形県朝日村田麦俣林道, 6. VI. 1994, 吉武採集; 1頭, 福島県松枝村砂子平, 11. VI. 1997, 堀川採集; 1頭, 福島県松枝村舟岐林道, 7. VII. 1997, 堀川採集; 1頭, 同地, 8. VI. 1998, 堀川採集。

末筆ながら、山形県での採集に同行していただいた仙台市の児玉雅一氏に感謝の意を表したい。

#### 参考文献

- KÔNO, H., 1930. Langgrüssler aus dem Japanischen Reich (Schluss). *Ins. matsum.*, (5): 1-31.  
MORIMOTO, K., 1962. Revision of the subfamily Curculionidae from Japan II (Coleoptera). *Mushi, Fukuoka*, 36(4): 21-40, pl. 5.  
野平照雄, 1986. チビシギゾウムシを岐阜県で採集, 月刊むし, (185): 40.  
野平照雄, 1988. 岐阜県における2頭目のチビシギゾウムシ. 月刊むし, (210): 39-40.  
野平照雄, 1991. チビシギゾウムシの記録, 月刊むし, (242): 39.  
平野幸彦, 1997. チビシギゾウムシの長野県小谷温泉の記録, 甲虫ニュース, (117): 8.  
(九州大学, 吉武 啓; 神奈川県横浜市, 堀川正美)

#### ○伊豆大島からのアラメエンマコガネの記録

アラメエンマコガネ *Onthophagus ocellatopunctatus* は、海岸の砂地に生息するが、もともと分布の限られる種であるうえに、近年の海岸環境の破壊で絶滅したと考えられる産地も少なくない。筆者らは、これまで記録のないと思われる伊豆大島から本種を確認しているため報告する。

30頭, 東京都大島町伊豆大島大島動物園, 6. VIII. 1993, 豊田浩二・松本慶一採集; 35頭, 同上, 21. IV. 1999, 荻部治紀採集。

採集地は大島の東岸斜面にある動物園で、土壌はおもに火山灰質のきわめて細かい黒い砂である。本種は園内では放し飼いにされているキョウのフンに集まっているものを多くみるほか(半日陰の場所に飛来が多い)、園周辺でもフントラップに多数が飛来した。しかし、本来の生息地と考えられる海岸部での調査では、数ヶ所でのトラップではあるがまったく確認できなかったことは興味深い。動物園での生息は開園後からのものであることは明らかであるので、今後は本来の生息地であろう海岸部での確認が必要と考えられる。なお、フンチュウの場合は人為的な移動(多くの場合は無意図)によるものと思われる不自然な分布例も多いことから、本種も何らかの手段で移入されたことも考えられる。

発表にあたり本種についていろいろご教示頂いた益本仁雄博士に感謝する。

(神奈川県立生命の星・地球博物館, 荻部治紀)  
(埼玉県嵐山町博物誌編さん室, 豊田浩二)  
(東京都高尾自然科学博物館, 松本慶一)

## 石田正明氏の思い出

穂積俊文

本年1月、寒中見舞いの書き出しで、昨年11月30日石田正明氏逝去のお便りを受け取った。

石田氏に初めてお会いしたのは、1975年9月14日、小田原の平野幸彦氏宅で「オサムシとカミキリを語らぬ会」というユニークな会合の席だった。箱根での採集の帰りですよと、瓶を見せて下さり糞虫が入っていた。他に三宅義一氏、笠原須磨生氏など8名が集まり歓談した。それ以来のお付き合いで、時々食葉性コガネムシの同定をして下さった。愛知県産のツヤズビロウドコガネ *Serica nitidiceps* NOMURA やエゾビロウドコガネ *S. karafutoensis*



好虫会(1988年7月17日)左より石田、大倉、穂積

NIIJIMA et KINOSHITA などの標本は石田氏によって見出された。

若い人と同じペースでは、採集行はハードであるとの理由で、1986年から60歳以上の甲虫採集家は好虫会と名付けて年1回採集会を催した。氏は時々出席され、1988年7月17日の長野県白根温泉での会は、湯川林道を一諸に歩いた。そこにはアオハムシダマシとアカハムシダマシが白い花にたくさん集まっていた。両者の交尾行動を調べながら歩いてみたが、アオとアカとが交尾しているのを見出すことはできなかった(昆虫と自然, 23(13): 19)。

ラメルコルニア研究会(ラメ研)は1985年発足、私は早速入会した。ミツノエンマコガネの分布の文を書くのに色々と御指導を受け、機関誌に発表することができた。また三重県御在所岳にはオオダイセマダラコガネが生息して、私は数多く採集したことを告げ、ロープウェイで簡単に登れることと、地元甲虫屋市橋 甫氏を紹介した。そしてある年、石田氏はお出掛けになった。だがその日は風があって皆無だったと、後日お便りを戴いた。さらに1992年7月25・26日にはこの地で、ラメ研採集会が開かれたが、残念ながらオオダイセマダラはゼロだった(Lamellicornia, 8号)。

晩年は体調すぐれず、とお手紙にしるされていた。神戸二中の御出身と承っていた。奇しくもコガネムシ研究家の高橋壽郎氏は同窓であり、期を同じくして昨年暮れに亡くなられた。コガネムシ愛好家のベテラン二人が相継いで亡くなられ、哀悼の意を表したい! 誰かラメルコルニア研究会を継いで下さらないでしょうか。御遺族の御希望でもある。

(愛知県小牧市)

## ○ミツオホシハナノミの奈良県からの記録

ミツオホシハナノミ *Hoshihananomia mitsuoi* NAKANE et NOMURA は三重県以西の本州と北九州(基準産地)だけから知られている。近畿地方では、筆者の知る限りでは三重県(高桑, 1979, 甲虫ニュース, (45): 10) 以外には兵庫県(岩田, 1976, 昆虫と自然, 11(3): 32; ほか) から記録があるだけだったが、奈良県産の標本を検したので、ここに報告しておきたい。

1♂, 奈良市春日山, 26. VI. 1998, 山口雄志採集, 筆者保管。

同地では本属の種としては、他にオオキボシハナノミ(亜種 *nipponica* NOMURA の基準産地)とウスキボシハナノミが知られており、前種は個体数も多く得られている。ミツオホシハナノミを含めたこれらは、特に雄で斑紋が類似しているため注意が必要であろう。

末尾ながら、貴重な標本を筆者に譲られた山口雄志氏にお礼を申し上げる。

(神奈川県立生命の星・地球博物館, 高桑正敏)

## 甲虫ニュース 第129号

発行日 2000年4月15日

発行者 大林延夫

編集者 妹尾俊男

発行所 日本鞘翅学会 〒169-0073東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館分館動物研究部昆虫第二研究室 ☎ 03-3364-2311

印刷所 (株)国際文献印刷社

## 昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6号, 有頭ダブル針も出来ました。その他、採集、製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150-0002東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

振替 00130-4-21129

電話 (03) 3409-6401 (ムシは一番)

F A X (03) 3409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社